The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床哲学的余白 [Vol.3]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 27-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

臨床哲学的余白

臨床哲学のメチエ99年夏の号を発行する。

前号まで主に教育問題について特集を組んできたが、今回は、医療研究グループのボランティア実習の報告を掲載した。

昨年度に引き続き、今年も金曜６限の授業では学生を含む多彩な顔ぶれの集まるなか、「ケアとは何か」についての活発な議論が続けられている。今回の医療研究グループの活動の位置づけについても、とりわけ、「理論と応用」という枠組みから脱することを試みる臨床哲学にとって「実習」がどのような意味を持つのかについて、熱い議論が交わされた。その内容すべてを紹介することができないが、看護教育に携わりつつ臨床哲学に籍を置く仁平さんの文章が、そうした議論の一端を見せてくれている。授業では、臨床哲学にとっての「実習」の意味や「方法論」について未だ議論が継続中であり、ケア・医療問題のみならず、教育、セクシュアリティなどの各方面においても、同様の議論が繰り返されている。

臨床哲学研究室は大学という教育機関にある。そして、臨床哲学において誰が何をどのように教育するのかという問題について、内外から様々な関心や疑問が寄せられている。しかしながら「臨床哲学」という名前の新奇さを除けば、哲学の教育がどうあるべきかは、それ自体、哲学の内在的問題ではないだろうか。模範とするテクストを持たない臨床哲学にとって、今のところ議論の場こそが教育の現場であり、議論することから思考すること、哲学を学ぶほかない。

また昨年度から「不登校」をテーマに臨床哲学研究会を組織してきた教育研究グループは、不登校の問題を入り口としてさらに多様な視角から「教育」という問題を考え始めている。最近では高等学校などでの哲学・倫理学の教育の現場に足を運び、それについての議論するほか、さらには「学ぶということ」について哲学的に掘り下げる試みを行っている。

《臨床哲学研究会》は今後しばらく定期的に開催するのをやめ、個人の研究をグループ内で十分に討論した上で、その研究に関係する講師を招き、より充実した研究会を目指すことになった。次回の研究会については決定次第お知らせする。

７月末、中岡教授を含む臨床哲学のメンバー５人が、イギリス、オクスフォードにて開催された、「哲学カウンセリング（コンサルタント）の国際会議」に出席した。会議では、「哲学カウンセリング」「ソクラテスの対話」「子どものための哲学」など、哲学を社会に活かす様々な試みについての報告や議論が行われた。その多くは臨床哲学の「方法論」にも直結するものであり、次号のメチエでは、単なる情報の輸入にはならない積極的な議論を提出したいと思う。（編集者）